

日英語の事態把握についての一考察

—認知言語学的視点から—

A Study of English and Japanese Construal

有 吉 淳一郎

日英語の事態把握についての一考察 —認知言語学的視点から—

有吉 淳一郎

1. はじめに

言語は、それぞれ独自の文法体系により構築されているがゆえに、異なる言語間で、語彙や発音などをはじめ、様々な点において違いがあるのは当然である。とはいえ、たとえ異なる言語間にそのような違いが認められるとしても、同一の状況や事柄についての言語化は、言語の違いに関係なく、基本的に同一の表現形式を用いてなされる——一般的にはこのように考えられているのではないだろうか。しかしながら、このような認識が正しくないことは、次例の対比から明らかである。

- (1) a. Where am I?
- b. ここはどこですか。

道に迷うなどして自分のいる場所が分からないとする。このような場合、英語では(1a)のように言う。そのまま日本語に訳せば、「私はどこにいますか」であり、相手から「どこって、そこにいるけど?」とでも言われかねない。このような聞き方は、日本語話者にとっては非常に奇妙である。これに対し、日本語では(1b)のように言うわけであるが、これもそのまま英語に直せばWhere is here?とでもなるであろうことから、これもまた英語話者からすると非常に奇妙に響くであろう。英語では話者自身を主語に据えて自分の居場所を尋ねる言い方をし、日本語では話者自身ではなく、自分のいる場所を主語として自分の居場所を尋ねている。英語と日本語のそれぞれの尋ね方は、他方の言語の話者からすると奇妙に聞こえるものの、当該言語を母語とする者にとってはごく自然な表現である。(1a)は英語話者にとって、(1b)は日本語話者にとって、きわめて自然な言い回しである。

換言すれば、それぞれが英語らしい、そして日本語らしい表現形式なわけである。

英語と日本語の双方において、話者が、自分のいる場所が分からないために、相手にその場所を尋ねているといった点は同じである。しかしながら、そのような同じ状況であるにもかかわらず、そこで発せられる表現は、英語と日本語で異なるわけである。なぜ両言語において、このように表現形式が異なるのであろうか。本稿では認知言語学の観点から、日本語と英語の比較対照を通じ、考察を進めていくこととする。

2. 認知言語学

認知言語学とはどのような学問であり、言葉に対してどのようなアプローチを取るのか。

認知言語学では、人間が有する一般的な認知能力や経験が、言語やその習得および使用の基盤であると考えられる。我々人間は環境の中に身を置いている。その中で身の周りの世界を知覚し、捉えた対象や出来事を言葉で表現するわけであるが、産出される言語表現とその対象となるものとの間には言語主体である人間が介在するために、必然的に次のことが意味されることとなる。それは、表出される言語形式には、言語主体である人間の捉え方が反映されている、ということである。この点に関し、山梨(1995)は次のように述べている。

- (2) 言葉は、人間の心のメカニズムに密接にかかわっている。言葉の意味は、外部世界に客観的に存在しているのではなく、われわれの具体的な経験を基盤とする認知のインターフェイスを介して理解され動機づけられている。言語主体としての人間は、外部世界との相互作用を通して、具体的な経験を意味づけしている。(中略)外部世界の理解には、われわれの認識が反映されている。またこの認識の過程は、いろいろな形で言葉の世界に反映されている。(山梨 1995: 3-4)

また同様に、山梨(2000)においては次の記述が確認される。

- (3) 認知言語学のアプローチでは、言語表現を、認知主体から独立した自律的な記号系としてとらえるのではなく、外部世界の主体的な解釈の直接的な反映としてダイナミックにとらえていく。より具体的に言うなら、認知言語学のアプローチでは、日常言語の表現は、ミクロレベルからマクロレベルにいたるとどのような要素であれ、主体が外部世界を解釈していく認知プロセスの反映として規定される。

(山梨 2000 : 11)

以上、言語形式には、言語主体による世界の捉え方が反映されているわけであるが、言語主体がものごとを捉える際の基盤となる知覚および認識は、言うまでもなく、言語主体自らの身体性に依存している。ゆえに、言語主体による捉え方は、それ自体の身体性に起因する、一定の制約を受けざるを得ない、という点にも留意すべきであろう。このことは換言すれば、言語主体によって産出される表現形式は、客観世界をそのままの形で映し出した、つまり、外界に存在する客観世界そのものではあり得ない、ということを示唆することとなる。この点について、本多(2003)は次のように述べている。

- (4) (前略) 人間は世界をそのまま認識できるわけではない。例えば人間は周波数が20ヘルツ程度から2万ヘルツ程度の空気の波を「音」として知覚することができるが、それより周波数の低い振動や高い振動は「音」として知覚することはできない。光ないし色に関しても同様である。人間が「色」として知覚できるのは赤から紫の間に限られる。赤外線や紫外線は人間の身体に影響を及ぼすが、これらが「色」として知覚されることはない。そしてこれらは人間の聴覚や視覚の仕組みによって規定されている。このように、世界についての人間の認識はまず神経系を含む人間の身体の構造によって制約されている。したがって、人間が認識する世界の構造は、人間が存在する以前から人間とは独立に存在してきた世界の構造そのものではありえない。あくま

でも人間が経験することができる限りでの世界の構造である。

(本多 2003 : 63-64)

上記に関連し、我々は日々の暮らしの中で様々なものを目にし、そして様々なことを耳にするが、人が得る情報の80%から90%は視覚に由来するとされることから、視覚を通じての刺激の入力はとりわけ重要であると考えられる(伊藤 2015)。我々人間は、視覚、聴覚、嗅覚、触覚、味覚といった五感を通じ、多様な情報を得ながら活動をしているわけであるが、この点において、視覚は特別な位置づけにあると言ってよいであろう。

以上、我々は世界を知覚ならびに認識し、言葉で表現するわけであるが、このようなプロセスを通じ発せられる表現形式には、言語主体である我々自身の捉え方が反映されており、そしてそれは、人間の身体性というフィルターを通じて築かれた再構築物なのである。このようなパラダイムのもと、認知言語学は、言語を一般的な認知能力から独立した自律的なものと捉え、言語表現の意味は、当該の表現によって示される対象そのものであるとする客観主義的意味論の立場を取る生成文法とは、その言語観において対照的な位置づけを与えられることとなる。

次節では、我々の言語使用の基盤を成す一般的な認知能力についての具体例を示すとともに、その言葉のあり方との関連についての例示を通じ、言語形式に言語主体による捉え方が反映されていることを概観していく。

3. 一般的な認知能力と、言語形式への言語主体の捉え方の反映

以下では、人間の有する一般的な認知能力のうち、その1例目として図と地の分化を取り上げ、言語形式に言語主体による捉え方が反映されていることを例示していく。

我々は目という感覚器を通して、外界世界を見るという行為を行うわけであるが、視野の中に2種類の異質な領域が存在する場合、その全体を均一にそして漠然と捉えることはしない。ある部分について輪郭が認められると、それと同時に、その部分は周囲からは浮かび上がった、独立したものとして認識される。このよ

うな認知プロセスは、日常的に経験していることではあるが、その多くは無意識に行われるものであるがゆえに、気づかれないことが通例であろう。

1例を挙げてみると、例えば青い空を見上げ、そこに1機の飛行機が飛んでいるとする。すると、飛んでいる飛行機が際立って認識されるであろう。このような際立ちをもつ要素に対して、空は相対的に際立ちが低く、背景の役割を担う。知覚心理学において、前者のように焦点が当てられ前景化される部分は「図(Figure)」、後者のようにその背景となる部分は「地(Ground)」と呼ばれる。そしてこのように、知覚対象を、際立ちをもって認識される部分とその背景とに分けることを「図と地の分化」と言う。どのようなものが図になりやすく、またどのようなものが地になりやすいのかについては、一定の傾向が認められる。¹

(5) 図と地の特徴

- a. 小さい存在が図で、大きい存在は地
- b. 動的な存在は図で、静止している存在は地
- c. モノ的な存在は図で、場所・空間的な存在は地
- d. 結果が図で、原因は地
- e. 到達点が図で、起点が地

先述の青空を飛ぶ飛行機の例では、空は空間であることから地として、そしてそこを飛ぶ飛行機は相対的に小さく、また移動している物体であることから、図として知覚されるわけである。なお、この図と地の分化の現象は、視覚対象に限らず、音楽にも当てはまるであろう。例えばメロディと伴奏から成る楽曲を考えた場合、メロディが際立ちをもって聞かれるのに対し、伴奏は相対的に際立ちが低く、その背景として知覚されるのではないだろうか。音楽におけるメロディと伴奏は、視覚における図と地の要素と並行する形で捉えられるのである。

さて、この図と地の分化についてであるが、通例はこれらのそれぞれの要素が入れ替わるということはない。先ほどの青空とそこを飛ぶ飛行機の例では、飛行機の方が図として、そして空の方が地として知覚されるのが普通である——つま

り、両者は固定的な関係にある。空の方が高い際立ちをもつものとして前景化され、飛行機の方がその背景となり地として認識されるということはないであろう。しかしながら、この図と地の領域が入れ替わって知覚されるケースがある。以下をご覧ください。

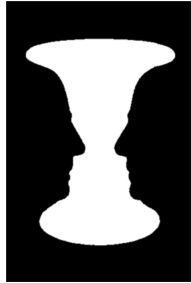


図 1

これは「ルビンの盃」と呼ばれる。多義図形として最も有名なもののうちの1つであろう。この図形は、その見方によって盃に、また2人が向かい合っているようにも見えることで知られる。ここで生じているのは、いわゆる「図と地の反転」と呼ばれる現象である。白い部分に焦点を当てると盃として、黒い部分に焦点を当てると向かい合った2人の横顔として知覚される。すなわち、知覚される刺激自体は同一の図形であるにもかかわらず、それがそのどこに焦点が置かれるのか——どの部分が前景化され、そしてどの部分が背景化されるのか、といった認知主体による認知のありよう——によって異なる意味合いをもつのである。

さて、このような図と地の分化に関わる能力は、言語のあり方にどのように関係しているであろうか。以下の例文をご覧ください。

- (6) a. The bottle is half full.
- b. The bottle is half empty.

1本の、中身が半分入ったワインボトルがあるとする。このボトルを描写するにあたっては、認知主体がそのどこに焦点を当てるのかによって、描写のあり方が変わってくる。ボトルの残量に焦点が当てられ、その部分が図として捉えられ、そして、空になっている部分が地として捉えられれば(a)の表現形式が取られ、その逆の捉え方がなされた場合には(b)の表現形式が取られるのである。客観的事実としてあるのは、ボトルがあり、その半分にワインが入っているという単一の状況であるが、言語主体の捉え方により、その表現形式が異なってくるのである。

以上のことは、次の日本語の例についても同様に当てはまる。

- (7) a. ボトルにワインが半分残っている。
- b. ボトルにワインが半分しか残っていない。

この場合においても、あるボトルについて、ワインの残量の方が前景化され図として捉えられた場合には(a)が、それとは逆に、空の部分の方が前景化され図として捉えられた場合には(b)が、その表現形式として用いられる。(6)の場合と同様に、対象に対する言語主体の捉え方が、言語形式に反映されているのである。²

次に、人間の有する一般的な認知能力の2点目として、対象を捉える際にその細かさを設定する能力——このプロセスにおいてなされるレベルの選択を「細密度」と呼ぶ——を取り上げ、言語形式に言語主体による捉え方が反映されていることを概観していく。

我々は対象を見る際、それをどの程度の細かさで見るといった点について、レベルを調整することができる。例えば、人の全身が写ったカラー写真があるとすると、その人物の全体を見ることができるのは当然であるが、カメラのレンズの倍率を上げるようにして——すなわち、細密度を上げていき——ある部分をより細かく見ていくことができる。最初認められていた色合いの滑らかさはその姿を消していき、次第に粗く見え始め、そしてついには各色を構成するドットに行き着くであろう。個人的な経験であるが、小さな頃にこれと似たようなことをテレ

び画面に対して行った記憶がある。普段テレビを見ている分には、映像の色調も輪郭も滑らかであるが、画面を虫メガネで見てみたところ、多数の、非常に小さな色の集まりがそこに見えたのである。メガネの着用も同じような経験を伴うであろう。例えば、ある棚をきれいだと思っていたところ、メガネを掛けたがために、その表面にチリやホコリがあるのが見えてしまう、といった具合である。これらにおいては、いずれも知覚対象は同一のものであるが、認知主体がそれを見る際に操作する細かさの程度具合に応じて、その捉えられ方が異なるのである。

さて、この細密度およびそれに関わる能力は、言語のあり方にどのように関係しているだろうか。この点に関し、昀山(2009)は次のような例を挙げる。例えば今、目の前に数多くの樹木から成る風景があるとす。この同一の対象を描写するにあたって、我々は個々の木の種類に注目し、「クヌギやコナラやクリの木がある」とも言えるし、木の集合を全体として捉え、「こんもりと生い茂った森」とも言うことができる。つまり、ある同じ対象について、その内部が複数の要素から構成されている場合、個々の構成要素に着目した描写ができる一方で、そのような個別性は捨象して全体を俯瞰するように描写することもできるのである(昀山 2009 : 77)。

以下は類例である。

(8) a. 議事堂の前に集まった人々

b. 議事堂の前に集まった群衆

(昀山 2009 : 78)

「人の集合」といった同一の対象を描写するにあたり、「人々」と「群衆」という異なる語彙による表現が可能である。同じ対象の描写であるにもかかわらず、このように違った表現が用いられるのはなぜか。概略、前者の「人々」では、その集合の構成メンバーの個々にも注目している一方で、後者の「群衆」では、その構成メンバーの個別性には注目せずに、その全体をまとめて捉えているのである。それぞれの表現形式の使用は、このような言語主体による捉え方の違いに動機づけられているのである。なお、昀山ではさらに、この「人々」と「群衆」につい

て、「様々な」という修飾語句を付加した際に生じる、興味深い意味の違いが指摘されている。「様々な人々」では、「人々」の構成メンバーの多様性、例えば、若い人もいれば年配の人もいるといったことを表せるのに対し、「様々な群衆」では、ある群衆の構成メンバーの多様性を表すことはできず、この場合は、群衆単位の多様性、つまり、群衆が複数存在し、そのそれぞれが学生の集団であったり、教員の集団であったりするといった状況を表すことになるのである(杉山 2009: 78)。

このような、対象をどの程度の細かさで捉え、またそのどの部分に注目をして言語化するのかといった点については、日常的に様々な場面で具体的な事例が観察される。例えば時間について言えば、普段の生活においては時間および分で済まされることも多いが、100メートル走などの競技においては、9秒97など、さらに細かい単位まで計測される。「1日」と「24時間」にしても、指示対象は同じではあるが、前者はその全体をまとめて捉えているのに対し、後者はそれを構成する単位である時間に注目した表現であると言える。

以上、細密度の調整といった認知プロセスに関わる能力の観点から、言語形式には、言語主体による捉え方が反映されていることを概観した。

では次に、人間の有する一般的な認知能力の3点目として、カテゴリー化を取り上げ、それを使用の基盤とする類別詞の振る舞いの考察を通じ、言語形式に言語主体による捉え方が反映されていることを概観する。

カテゴリー化とは、ものやことを、その共通性に基づいて分類することである。なお、このカテゴリー化のプロセスによって分類されたグループ毎のラベルはカテゴリーと呼ばれる。1例を挙げると、例えば「自動車」であれば、搭載したエンジンやモーターで車輪を動かし路上を走行するといった機能があり、排気量は1000ccから3000ccほど、乗車人数は4人か5人、ドアは2枚か4枚、そして、使用燃料はガソリンか軽油、といったような種々の特徴があるであろう。我々は、このような共通性のもとでまとめられたものに「自動車」というラベルを付し、そしてそのように称しているわけである。人間は、その数が無限とも思えるほどのもの、ならびにことに溢れる世界で暮らしている。そのような環境の中で、

我々は様々な事物を分類および整理することで——換言すれば、仕分けるという営みを通じ——世界を理解している。カテゴリー化の能力のおかげで、例えば、4本の脚の付いた正方形の木製の天板も、3本の脚の付いた円形のスチール製の天板も、そして床面に接する部分がそれぞれ3本に分かれた2本の脚の付いたガラス製の長方形の天板も——これらはいずれも脚の数、天板の形状や材質など、様々な点で異なるが——すべて単一の「テーブル」というカテゴリーの名のもとに集約される。

カテゴリー化の能力がなければ、この世に存在する、ありとあらゆるものを一つひとつ個別に命名したり、解説的に説明したりする必要に迫られるであろう。これは言うまでもなく、現実的ではない。共通性に基づき分類し整理することによって、我々はものごとを効率的に処理することが可能となる。人間の生活の営み、認知能力の有限性に鑑みると、我々がこのような能力を有することは必然であると言えよう。

さて、このようなカテゴリー化という認知能力との関連から、以下では、日本語における類別詞の使用事例を通じて、言語形式に言語主体による捉え方が反映されていることを見ていくこととする。

類別詞とは「枚」や「匹」などのように、名詞に後続させ、当該の語がどのような事物の数量であるのかを表す語である。李(2010)は、類別詞「本」の用例の観察を通じ、その使用には、言語主体の対象に対する捉え方が関与しているとする。

「本」はどのような対象物に対して用いられるだろうか。まずは直感的にも、当該の事物が「細長いもの」と捉えられる場合であろう、と考えられるが、李はこのことに加え、「無生物」といった属性が従来その使用条件とされてきたとし、以下の例を挙げる。

(9) a. 3本の鉛筆

b. 3本のチューリップ

(李 2010 : 43)

(10) a. *3本のサッカーボール

b. *3本のコブラ

(李 2010 : 43-44)

(10a, b)が容認されないことから、「本」については、細長いといった形状に加え、有生・無生といった属性も、その生起の条件であることが分かる。これらを見る限り、「本」が使用されるにあたっての条件は、「細長さ」と「無生物」で問題ないように思われる。

しかしながら、李は「本」の使用に関し、従来の分析では有生物であるがゆえに「匹」で数えられるとされてきた魚が、「本」によって数えられる場合があることを指摘する。

(11) a. 敗者復活戦で1本の魚しか検量してもらえなかった。

b. 漁師が2本のマグロを解体した。

c. ??母がスーパーで3本のサンマを買ってきた。 (李 2010 : 44)

(11a)(11b)は、それぞれの対象物が、フィッシング大会での獲得物、および水揚げされたものの例であるが、容認されるのである。しかしながら、(11c)に見られるように、魚であっても一様に容認可能というわけではない。(11a, b)は容認されるのに対し、(11c)は容認度がきわめて低い。これはなぜであろうか。

以上に加え、李は次の例を挙げる。

(12) a. スタッフらはレイアウト図に沿って約900本の机を立て、椅子を置いていきます。

b. 美容師3人がよってたかって6本のドライヤーで妻の髪をいじった。

c. 22本のHTMLを合計200枚の画像ファイルを使用して編集した。

(李 2010 : 47-48)

これらの例において、問題となる対象物については、規範的には「台」や「枚」

といった類別詞が用いられるわけであるが、ここではそうではなく、「本」が用いられている。この事実に関し、李は、認知主体と対象物との心的距離の遠近といった観点から、対象物が職業上の道具の延長線上で捉えられた場合に、その使用が可能となることを指摘している。つまり、言語主体による対象物の解釈のあり方——換言すれば、捉え方——がその使用の背景にあると考えられるのである。

李は(11a-c)についても同様に、すなわち、専門的な立場で魚が捉えられることにより、「本」の使用が可能になっているとする。(11a)では競技者、(11b)では漁師などが想定されるであろう。いずれの場合においても、対象物に対する、そのような専門的立場からの視点、捉え方といったものが、その使用を動機づけていると考えられるわけである。これらに対して(11c)では、そのような専門的な立場からの視点が想定されにくいことから、容認性が低いのである。

以上、日本語における類別詞の使用事例についての考察を通じ、言語形式に言語主体の捉え方が反映されていることを概観した。

4. 日英語における視点

本稿の冒頭で、英語と日本語では、道に迷うなどした際に用いられる表現形式が異なることを見た。

- (13) a. Where am I? (= (1a))
b. ここはどこですか。 (= (1b))

自分がいる場所を主語にして尋ねる形式を取る日本語話者の立場からすると、話者自身を主語としてその場所を尋ねる形式を取る英語の表現——直訳すれば「私はどこにいますか」という言い方——に違和感を覚えるわけであるが、それぞれの言語においては、それぞれの言い回しが、その言語「らしい」表現なわけである。このような、日英語における表現形式の対照のもと、本稿冒頭において発せられた問いは、話者が自分の居場所を尋ねるという同一の状況であるにもかかわらず、なぜ英語と日本語とでは、このような異なる表現形式が用いられるのか、

ということであった。

前節で、言語形式には、言語主体による捉え方が反映されていることを概観したが、このことに鑑みると、上記ペア(13a, b)における英語と日本語の表現形式の違いは、話者の事態に対する捉え方が、それぞれの言語において異なっている、という可能性を示唆することとなる。以下ではこの点について、池上(2006)を参照しながら考察を進めていく。

池上(2006)は、この(13a, b)に見られる表現形式について、「自己の他者化」という観点から論じている。これらの例文の用いられる状況においては、話者が、自分のいる場所が分からなくなったために、自身のいる場所を尋ねているわけであるが、英語における(13a)の構文は、自分ではなく、誰か第三者のいる場所を尋ねる際に用いられる形式と同一である。例えば、ある女性のいる場所を尋ねる場合に“Where is she?”と言うが、(13a)の“Where am I?”においても、まさにこれと同じ形式が用いられている。これはすなわち、英語話者は、他人の姿を見ているかのごとく、自分の存在をも他者化して捉えている、ということに他ならない——まるで幽体離脱でもして、自分の姿をどこかから眺めているかのような言い方である。対して日本語では、自分のことを第三者と同列に扱うことはしない。日本語においては、話者が自己から抜け出し、自分自身の姿を、それを含む状況の外から捉えるといった自己の他者化のプロセスはなく、話者はあくまでも自己の中に留まったままなのである。このような、日英語における事態把握の基本的構造は、以下のように図示されるであろう。

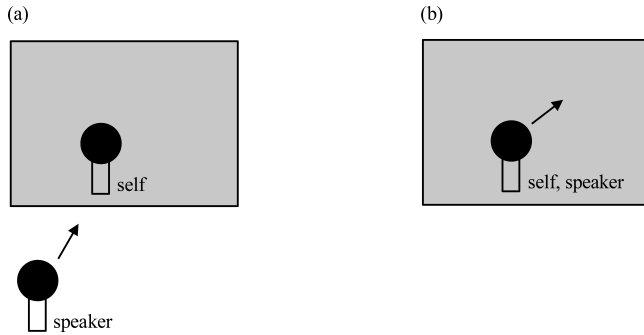


図2

これらにおいて、四角の枠は事態の場面を表している。(a)は英語の事態把握のあり方を示しており、話者が事態全体をその外から俯瞰するように見ており、視線の先に自己の存在がある。一方(b)は、日本語の事態把握のあり方を示している。日本語では英語とは異なり、話者はあくまでも自己の中に留まっており、場面に位置づけられる。当然のことながら、視線の先に自己の姿はなく、その視野に捉えられるのは自己を取り囲む外界である。

ここで、日英語それぞれの話者の実際の「見え」について、概略、以下のように図示されるであろう。



図3

(a) (b)の四角の枠は、話者の視野に捉えられる見えの範囲を示している。英語では、自分のいる場所を尋ねるのに I ——日本語にすると「私」——を主語に

するわけであるが、これは、(a)に見られるように、話者が、その見えの中に姿が捉えられる自分自身の場所を問うているからである。一方、日本語では(b)のように、話者の見えの中には自分自身の姿は含まれないことから、当然、自分自身が言語化される対象となることはなく、よって文に表出されることもない。その視野に捉えられるのは自身を取り巻く外界であり、日本語ではこのような見えが「ここ」として、そのまま言語化されるわけである。

以上、事態把握のあり方について、英語では事態を場面の外から捉えているのに対し、日本語では内から捉えている——英語の“Where am I?”と日本語の「ここはどこですか」といった異なる表現形式は、このような、両言語における事態に対する視点のあり方の違いによって動機づけられているのである。

池上(2006)を参考に、もう1例挙げる。

(14) a. “Nobody’s here except me.”

b. 「(ここには)誰もいません。」

(池上 2006 : 163)

例えば部屋の様子を見に行き、そこに誰もいないことを誰かに伝える場合、どのような言葉が発せられるか。英語では(14a)のとおり、先述のWhere am I?と並行する言い方で、つまり、話者自身が含まれた形が取られる。この英文を文字どおり日本語に訳せば、「ここには私以外誰もいません」となるわけであるが、このような言い回しに対して日本語話者は、何か余剰的な印象を抱くのではないだろうか。日本語ではもっとすっきりとした、(14b)のような表現形式が用いられ、「私以外」といった要素は含まれないことが一般的であろう。「ここには」の部分についても、省略されることの方が多くと思われる。日本語では、自己は認識の対象となっておらず、よって言語化されないのである。

事態把握について、英語ではその外から捉えるのに対し、日本語ではその内から捉えるといった視点の違いにより、それぞれの言語における表現形式が異なるわけであるが、ここで、以下の表現についても同様の観点から論じられるであろう。

(15) Someone is in here.

これは実は、筆者が海外へ渡航した際に、カフェのトイレで耳にしたものである。トイレに行くと数個の個室しかなく、しかもすべてドアが閉まっていた。使用中であるのか空いているのか、定かでなかったのでノックを試みた。その応答として、中から発せられたのがこの表現だったのである。

この文は日本語にそのまま直訳すれば、「誰かがここの中にいます」である。同様の状況においては日本語ではきっと、「入ってます」と言うであろう。主語は明示されていないものの、トイレに入っているのはまぎれもなく「この私」であり、英語に見られる「誰かが」などといった言い方は、日本語話者からすると非常に奇妙に思われるわけであるが、このような表現形式もまた、英語における「自己の他者化」といった認知プロセスを反映したものと捉えられるであろう。この意味において、前掲の(13a)や(14a)などと同様、まさに英語的な表現であると言えるであろう。

以上、話者の視点が場面の外に置かれるのか、もしくは内に置かれるのか、英語と日本語それぞれの表現形式の違いを動機づけていることを見たが、ここで本稿を終えるにあたり、両言語の表現形式について、「自然さ」の観点から考えてみたい。

我々人間は普段の言語活動において、基本的に自分の視点から見えるものを言語化し語るという事実を鑑みると、英語と日本語の表現形式を比べた場合、日本語の方——前掲の(13)(14)であれば(b)——が自然であると言えるのではないだろうか。と言うのは、エルンスト・マッハの「自画像」に描かれているように、我々はその目の位置からして、基本的に自分では自分自身の姿を見ることはできず、視野に捉えられるのは、自己の内側から、すなわち、自分自身を原点として、そこから見える周囲の世界であるからである。³

日本語では、英語に見られるような自己の他者化といったプロセスを介さず、言語主体の目に映る「見え」がそのまま直接的に言語化される。この意味において、表現形式のあり方については、日本語の方が英語よりも自然である——この

ように言えるのではないだろうか。

5. おわりに

言語使用の基盤を成す、人間の有する一般的な認知能力について具体例を提示し、言語形式には言語主体による捉え方が反映されていることを例示した。その上で、日英語の表現形式のあり方について、日本語では言語主体の「見え」が直接的に反映されているのに対し、英語では自己の他者化といった認知プロセスを介しており、日本語と英語とで、同一の状況下において言語主体により発せられる表現形式が異なるのは、それぞれの言語において言語主体の視点の置かれ方が異なることに起因することを論じた。

注

1. (5)は山梨(2004:160)に基づく。
2. 以下の例文における容認性の差異についても、(5)に示された図と地の特徴から捉えられるものである。

(i) a. コップがテーブルの上にある。

b. ?テーブルがコップの下にある。

コップがテーブルの上にあるという位置関係においては、テーブルがコップの下にあるということも成立する。すなわち、(a)(b)の両文は真理条件的には同一である。しかしながら実際には、(b)は(a)よりも容認度が下がる。(b)の不自然さは、文中の要素の配置が(5)における図と地の特徴に反している、すなわち、場所的なものであるテーブルが主語であり図となっており、本来そこに位置づけられるはずのものであるコップが地となっていることに帰せられるのである(山梨2004:160)。

3. マッハによる自画像は大変ユニークな絵である。ふつう自画像と言えば、鏡などに映った自分の姿を見ながら描くわけであるが、マッハの自画像ではそうではなく、自分が今実際に目を通して見ている外界が「そのまま」描かれている。それは、右目を閉じ左目だけを開けた状態で描かれているが、具体的には、カウチに座り、両脚を投げ出し交差させ、右手にペンを持っている、このような様子が描

かれている。そしてさらに、普段は視野の中に存在していることを特に意識はしないが、鼻の左側の膨らんだ部分も描かれている。その鼻の斜め下には髭も見える。また、投げ出した脚の向こうの方には、窓や壁があり、下方には板張りらしき床が見える。我々は日頃さほど意識はしないが、自分自身の姿をこのようなあり方で捉えているのである。

参考文献

- 本多啓. 2003. 「認知言語学の基本的な考え方」 辻幸夫（編）『認知言語学への招待』（シリーズ認知言語学入門第1巻）63-125. 大修館書店.
- 池上嘉彦. 2006. 『英語の感覚・日本語の感覚』 日本放送出版協会.
- 伊藤亜紗. 2015. 『目の見えない人は世界をどう見ているのか』 光文社.
- 李在鎬. 2010. 『認知言語学への誘い』 開拓社.
- 初山洋介. 2010. 『認知言語学入門』 研究社.
- 山梨正明. 1995. 『認知文法論』 ひつじ書房.
- 山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』 くろしお出版.
- 山梨正明. 2004. 『ことばの認知空間』 開拓社.